瑞源寺本堂について

福井城の建築に関する研究 その1

THE MAIN HALL OF ZUIGENJI-TEMPLE

A study on the buildings of Fukui castle
in Edo period, Part 1

吉田 純一*

Junichi YOSHIDA

Zuigenji temple in Fukui city is a well known temple which was built by Masachika MATSUDAIRA, the fifth feudal lord of the Fukui clan. The main hall was moved from the residential building called "Kozashiki", which was a section of the "Honmaru palace" of Fukui castle. The palace of "Kozashiki" was built between the thirteenth year of the Bunsei (1830) to the second year of the Tempo (1831) for Naritsugu MATSUDAIRA who was the fourteenth feudal lord of the Fukui clan. The main hall of Zuigenji temple is of great historical importance as it is only remaining building of the original Fukui castle.

Keywords : Zuigenji temple, main hall, Fukui castle,
honmaru palace, kozashiki

瑞源寺, 本堂, 福井城, 本丸御殿, 小座敷,

1. 研究の目的

越前福井藩の初代藩主結城秀康は、徳川家康の次男で、二代将軍秀忠の兄にあたる人物であった¹⁾。そのため福井藩は親藩に列せられ、御三家に匹敵する家格を有し、石高も藩創立時には68万石あって²⁾、隣国の加賀に次いで全国第2位の位置にあった。

秀康によって慶長6年～11年(1601～06)に築かれた福井城は、こうした格式高い家柄や大藩の本拠にふさわしい五重環郭式の大城で、築城に際しては家康自らが縄張を担当したとか、西国大名の助役があったとの言い伝えもある³⁾。

これまで福井城の沿革や縄張りについてはいくつか報告されているが、福井城の建築に関する論考はほとんどみられない⁴⁾。これは本丸跡と内堀が残るだけで、建築遺構が1棟もないことに起因していると思われる。

ところが、福井藩主の系譜を引く松平宗紀家(在東京)が所蔵されている「松平文庫」の中には、福井城の建築たとえば天守や本丸御殿などの絵図面や文書類が数多く

残されている⁵⁾。また、本稿で述べるように、これまで皆無といわれていた福井城の建築の遺構が実在していることも判明した。この他、本丸跡には旧天守台が現存し、石垣には城門の痕跡が残っている⁶⁾。つまり、これらを総合的に検討すればかなり具体的に福井城の建築の様相が解明できると思われる⁷⁾。

ところで、江戸時代の越前には、福井城のほかに丸岡城や大野城があり、勝山城や鯖江城には実現はしなかったものの天守築造の動きがあった。そして南隣する若狭には酒井氏の居城小浜城が存在していた。ここ数年にわたり、これらの城郭やその建築について考察してきた⁸⁾が、こうした福井県内の近世城郭を総合的に検討しようとする時、親藩かつ68万石の大藩の居城であった福井城がもつ意義はきわめて重要であると考えられる。

本研究は、以上のような観点にたち、「松平文庫」などの文献史料や遺構の調査を総合しながら、まず福井城とその建築を具体的に解明することを目的としている。

本稿はその第一報として、福井市内に所在する瑞源寺

本稿は1992の日本建築学会大会で発表した「瑞源寺の建築(4)史料からみた現本堂の前身建物」, 「同(5)現本堂と福井城本丸御殿の小座敷」に新たな知見を加えて書き改めたものである。

* 福井工業大学工学部建設工学科 助教授・工博

Associate Prof., Dept. of Architecture and Civil Engineering, Faculty of Engineering, Institute of Technology, Dr. Eng.

本堂が福井城の建築遺構であることを検証するものである⁹⁾。

2. 瑞源寺と松平昌親について

瑞源寺は福井市街地の西寄りに位置する足羽5丁目にある臨済宗妙心寺派の寺である。当寺は泰澄大師によって天平宝字2年(758)に創立され、宝亀年間(769~780)は光仁天皇の勅願所にもなったと伝わる¹⁰⁾が、その後、衰退したために今日では江戸時代の延宝元年(1673)に華藏寺の住職太随和尚が吉江に小院を建てたのを草創としている¹¹⁾。吉江とは現在の鯖江市吉江町である。ここは松平昌親が正保2年(1645)に兄の福井藩四代藩主光通から2万5,000石を譲り受けて成立した吉江藩¹²⁾の本拠地であった。昌親はその年の12月に逝去した実母高照院の位牌をこの寺に納めた¹³⁾。高照山という山号も母の法名に起因している。翌延宝2年、昌親は福井藩五代藩主として吉江から福井へ移ることになった際、瑞源寺も福井城下の西方に位置する小山谷すなわち現在地に寺地を与えられ¹⁴⁾、今日に及んでいるのである。

昌親はわずか1年ほどで藩主の座を退いたが、貞享3年(1686)に六代綱昌が改易されると、25万石を与えられて再び藩主に返り咲き¹⁵⁾、今度は吉品(よしめ)を名乗って、宝永7年(1710)までの約24年間にわたり藩政の立て直しに務めている¹⁶⁾。そして、翌正徳元年(1711)9月12日に死去すると、彼の位牌もやはり瑞源寺に納められ、翌年には母の隣に墓もつくられた¹⁷⁾。この廟所は今も境内西側の足羽山中腹に残っている¹⁸⁾。

このように瑞源寺は福井藩五代と七代の藩主を務めた昌親の菩提寺であり、同じ藩主の菩提寺でも大安寺(福

井市田谷町)のように¹⁹⁾、数代の藩主にかかわるものではないが、一時は廃藩の危機にあった藩の立て直しに当たった昌親の功績は大きく、その後も幕末に至るまで福井藩の厚い被護を受けていたのであった。

3. 瑞源寺本堂について

(1) 瑞源寺の現況

図-1は瑞源寺の現在の境内の様子を示している。境内は足羽山北麓にあり、境内の南から西にかけて足羽山裾が迫っている。北東隅に山門があり、そこから南西へ参道を進むと、東向きに本堂がたっている。本堂の北側に庫裏がつながり、玄関を入ると、右手が台所で、その奥に庫裏の座敷と書院が続いている。そして本堂の裏側(西側)の庭を横切って山の傾斜面に沿った石階段を五十段ほど登ったところに先述した昌親(探源院)と彼の母高照院の廟所がある。なお、以前は本堂の前方に中門があり、その少し東側には鐘楼もあった²⁰⁾。

(2) 本堂の建築形式

図-2は本堂の現状平面図である。写真-1、2はそれぞれ外観と内部の様子を示している。本堂は一重入母屋造・桧瓦葺の建物で、桁行(南北)が8間半、梁間(東西)が5間半、正面(東面)の南寄りに向拝がついている。内部は南端に2部屋が前後にあり、その右側に内陣(仏壇の間)と上間、室中、下間など6室が前後2列に配され、前方に入側と縁がついている。内陣と南端の2部屋以外は畳敷で、天井はいずれも棹縁天井であるが、特に上間と下間のものが古式である²¹⁾。柱は角柱で、大きさは11cm(約3寸6分)ほどしかなく、本堂の柱としてはき

図-1 瑞源寺の境内現状図

図-2 瑞源寺本堂の現状平面図

わめて小さく、柱割も1間間隔のほか2間持ち放しのところもあって、通常の本堂にみられるような整然とした柱配置にはなっていない。なお柱割は6尺×3尺の畳を基準にした畳割制が採用されている²²⁾。

以上のように、正面の向拝のつき方や内部の柱がきわめて細いこと、柱位置が整然としていないこと、天井が低いことなど、本堂の建築にしては不自然な点が見受けられる。

4. 移築に関する記録

瑞源寺には、今の本堂は他から移築されたとの言い伝えがある。そこでまず、本堂の移築に関して文献的に検証してみることにする。

当寺所蔵の「瑞源寺記録」のなかに、「萬延元年庚申年七月吉祥日、御本丸御小座敷ヲ以、奉再建本堂一字」とあり、つづいて御作事改役の芦田十右衛門をはじめ御作事奉行や棟梁大工などこの作事に関係した14人の奉行や職人の名前も併記されている²³⁾。この記録は棟札の写しであろうが、これより万延元年(1860)7月に本丸の小座敷を用いて本堂が再建されたことがわかる。

ところで、瑞源寺は正徳5年(1715)と文化10年(1813)に大火にあっている。正徳の火災後は藩主の別邸であった御泉水邸から建物を移築し、再興したようである²⁴⁾。文化の火災²⁵⁾後も諸堂は逐次、再建された²⁶⁾が、本堂

は仮の粗末なものであったようで、万延元年9月に迫っていた昌親公の百五十回忌の法要に備えて、寺方では藩に対して本堂の新築をしばしば願ひ出ている²⁷⁾。しかし、当時は藩も財政難でなかなかよい返事をもらえずにいたが、「瑞源寺記録」の万延元年5月5日条に「先達而御願之儀与者相違仕候得共、此度於御本丸御不用御立物御座候間、此御立物を御寄附被仰出候間(後略)」とあり、新築の許可ではないが、本丸にある不用の建物を寄附してもらえることになったのであった。

本丸とあることから「松平文庫」の福井城本丸御殿に関する指図を検索したところ、図-3に示したように、本丸御殿の中でも北に離れてあり、長い廊下で結ばれている小座敷という御殿がみつかった。いわゆる奥向きの御殿であり、この一画は文政13年~天保2年(1830~31)にかけて十四代藩主斉承(なりつむ)の大奥御座所としてつくられたものであった²⁸⁾。

そして、嘉永元年(1848)12月付本丸御殿指図によると、本丸御殿の中でこの小座敷だけが白紙で覆われている。これは当時小座敷が使われていなかったためと考えられ、この小座敷こそが5月5日に寄附された「御不用御立物」に相当するものとみられる。となれば冒頭に示した「御小座敷ヲ以、奉再建本堂一字」との記述にも合ってくるのである。

以上のように寺蔵の記録や「松平文庫」の指図などの文献史料によれば、瑞源寺本堂は昌親公の百五十回忌の

図-3 福井城本丸御殿図
(松平文庫「御本丸御殿ノ図(天保2年以降)」より作成)

法要を営むために、当時不用になっていた福井城本丸御殿の大奥にあった小座敷という建物を万延元年7月に移築し、本堂として再用したものとなる²⁹⁾。

5. 本堂と小座敷の比較

(1) 小座敷について

前述のように、瑞源寺へ移された小座敷という御殿は、文政13年～天保2年につくられた。

創建当初の小座敷は図-4のようで、本丸御殿の主要部から幅1間半、長さ10間の廊下でつながり、本体は東西8間半、南北6間で、東や西方に張り出し部がついている。主要部から延びる廊下が接続する西端に1間半幅の奥に長い部屋があり、それから東に御次之間(8畳)、御座之間(8畳)、御休息之間(8畳)の3室が中央横一列に並んでいて、これら3室の南と北の両側に1間幅の人側と半間の縁および土縁がついている。

同じ本丸御殿の指図でも、嘉永元年(1848)12月付けの「御本丸御殿ノ図」にみられる小座敷は図-5に示す通りで、御休息之間が10畳に改造されるなど細部にいくらか変更がみられるが、基本的な構成は創建時と変わっていない。

(2) 本堂と小座敷の比較検討

瑞源寺へ移されたとなれば、図-5の状態の小座敷であろうから、これと瑞源寺本堂の現状平面図(図-2)を重ね合わせてみたのが図-6である。小座敷の張り出し部分を除けば、両者の規模はほぼ同じである。中央部の3室、すなわち本堂の上間・室中・下間と小座敷の御次之間・御座之間・御休息之間に注目すると、上間と御次之間はピッタリ一致し、室中・下間境の間仕切りを一間左へずらせば、室中と御座之間、下間と御休息之間もそれぞれ重なってくる。また前方の人側と縁はそのまま小座敷の状態に合っており、この前に半間幅の土縁を復すれば小座敷と同じ状態になる。また南端の2室も境の間仕

切りを取り払い、かつ前方の部屋の正面を半間後退させれば、やはり小座敷の西端の奥に長い部屋に合ってくる。内陣を中心とした後半部は大きく改変されているが、このように現本堂と小座敷に関連性が強くうかがえるのである。

(3) 痕跡の検討

次に現本堂にみられる痕跡を詳しくみることにする。図-6において、ハとニの位置には現在は柱がないが、ハの位置は天井裏に通っている梁の下端に柱のほぞ穴が残り、ニの位置はもとの柱の上部が切られたままの状態が残っている。したがって、これらハとニの位置にはもとは柱がたっていたことになり、そうなれば小座敷の柱配置と合ってくる。上に述べた室中・下間境の間仕切りについてももとは現状より1間左にあったことになり、室構成も合致してくるのである。また、ホとヘは向き合う柱の内面に床框と落掛の痕跡が残っている。図-4および図-5より明らかなように、御休息之間が8畳から10畳に改造された際、ここに床が設けられている。さらに、トとチの現在の間仕切りは鴨居の取り付け状況から後補のものと思われ、トは以前は間仕切りがなく、チはこれより半間内側の柱筋に鴨居の仕口跡があることから、もとはこの位置で仕切られていたことになる。これらも小座敷の左端の奥に長い部屋の状態に合ってくる。さらにリ位置は現在は間仕切りがないが、鴨居の仕口跡があることから以前はここで間仕切られていたことがわかる。これも小座敷と合ってくる。

このように、上にみた現本堂と小座敷の相違は、現本堂にみられる痕跡もとに復原すれば、いずれも矛盾なく説明できるのである。

先述したように、小座敷は奥向きの、藩主のくつろぎの御殿で、庭に囲まれてたっていることや図-4や5にみるように人側や縁、土縁を両側に備えていて開放的な、数寄屋風の御殿であったと思われる。そうなれば、4寸に満たないような細い柱が使われていたことも納得でき

写真-1 瑞源寺本堂外観

写真-2 瑞源寺本堂内部

図-4
天保2年の小座敷
(松平文庫「天保二年出来 御本丸御住居中之図」より作成)

図-5
嘉永元年の小座敷
(松平文庫「嘉永元年十二月 御本丸御住居中之図」より作成)

図-6
瑞源寺本堂と小座敷の比較図
(実線は本堂、破線は小座敷を示す)

写真-3 母屋材に残る
「御小座敷」の墨書

るのである³⁰⁾。

(4) 移築を裏付ける墨書

現本堂が小座敷の遺構であることは、今回の調査で発見された墨書からも裏付けることができる。

まずは小屋裏の母屋材に「御小座敷」との墨書がみられる。棟木を含めて11列に架け渡されている母屋は、どの列も4本の材で継ぎ足されているが、それぞれの材に写真-3のようにある。

そして北側の破風板の内面には「文政十三年庚ノ四月十一日」との墨書がある³¹⁾。先述のように文政13年は、小座敷を含む、斉承のための大奥御座所の造営が始まった年である。

つまり、これらの墨書はまさに現本堂の前身建物が小座敷であることを裏付けるものである。しかもこうした墨書がほとんどの母屋材や破風板にみられることは、小屋組や屋根形態も小座敷時代のものをそのまま踏襲していることを示唆している。

このほか図-6に示したイとロの位置にある釣束の上部すなわち天井裏の部分には「(御)休息之間鴨居下ヶ短」[□]という墨書もあった。これは 現本堂の下間の間がもと御休息之間と呼ばれていたことを示唆するものである。したがって、これも現本堂＝小座敷を裏付ける確証のひとつになる。

6. 結語

以上のように、瑞源寺の現在の本堂は福井城本丸御殿の遺構であり、小座敷という御殿を移築、再用されたものであることを検証することができた。

この御殿は十四代福井藩主斉承の大奥御座所の御殿のひとつとして文政13年から天保2年(1830～31)につくられたもので、福井藩五代(代)藩主昌親(諡)公の百五十回忌の法要を執り行なうために譲り受け、万延元年(1860)7月に再建されたものである。

外回りの柱は一部取り替えられているが、内部の柱や梁などの部材はほぼ小座敷時代のものをそのまま再利用している。内陣を中心とした後半部は大きく改変されているが、中央部の上間、室中、下間の3室は少し間仕切り位置を変えただけであり、それらの前方の1間幅の豊廊下と半間の縁は、土縁を復すればそのまま小座敷に近い状態になる。

この小座敷は幕末につくられたもので、秀康時代すなわち慶長期の創建当初、あるいは寛文9年の火災後の再建時までさかのぼるような古い遺構ではないが、これまで皆無といわれてきた福井城の建築遺構の実在例であることは疑いなく、福井城の建築を具体的に知る上で貴重な遺構といえよう。

また、福井市を中心とする周辺地域は、昭和20年の空襲や同23年の大震災で大きな被害を受けたために歴史的な古建築はほとんど現存していない。こうした点でも瑞源寺の本堂がもつ意義は大きいと考える。

◇謝辞◇

調査に際しては、瑞源寺ご住職の花房禅佑氏とご家族の方々に多大なご理解を賜った。また、国京克巳(剛毅)・高島 猛(剛輝)・池田俊彦(剛毅)の各氏ならびに当時、福井工業大学建設工学科吉田研究室に在籍していた卒研究生には調査の協力を得た。末尾ながら記して感謝申し上げる。

(註)

- 1) 松平宗紀氏所蔵「松平文庫」の『御系図』秀康の項に「將軍家康公第二男」とある。
- 2) 『同』秀康の項に「同(慶長)五年庚子十一月封越前国六十八万石余」とある。
- 3) 福井藩士の山崎七郎右衛門英常が弘化2年(1845)ころに書留めた『続片鶴記』には「慶長六辛丑年九月より北庄御城改依上意に諸国より人夫を被出或は西国大名中より出と云(後略)」とある。また『日本城郭大系Ⅱ 京都・滋賀・福井』(新人物往来社 1980)の福井城の項(p357)には「清水丹後守好正を普請総奉行とし、本丸・二の丸は徳川家康みずからが縄張りし(後略)」とある。
- 4) 福井城の建築に関しては、松岡利郎：福井城本丸御殿について(一)、若越郷土研究、23/5 pp81～94 1978、同(二)、若越郷土研究、23/6 pp101～116 1978)がある。これは「松平文庫」所蔵の福井城本丸御殿に関する16葉の図面を紹介するとともに時代的考察を加えたものである。
- 5) 「松平文庫」は所蔵者の松平宗紀氏の依頼を受けて福井県立図書館に保管されている。
- 6) 有田幸代、吉田純一：福井城山里口御門について、日本建築学会北陸支部研究報告集、第38号、1995.8 (磯仲)
- 7) 吉田純一：福井城天守について(1)絵図にみる建築的形態、日本建築学会北陸支部研究報告集、第33号、pp293～296 1990.7、ならびに 同：同(2)天守台からみた考察、日本建築学会大会学術講演梗概集、pp859～860、1990.10
また『復元大系日本の城 3北信越』ぎょうせい出版、pp10～31、1992.11 にも福井城天守や本丸御殿について発表している。
- 8) 吉田純一：福井の城、フェニックス出版社 1994.2 において福井県内の各城郭について報告している。
- 9) 吉田純一、国京克巳、伊豆蔵庫喜：瑞源寺の建築(4)史料からみた現本堂の前身建物、ならびに 同：同(5)現本堂と福井城本丸御殿の小座敷、ともに日本建築学会大会学術講演梗概集 pp957～960 1992.8

- 10) 泰澄大師讃仰会編：越知山大谷寺縁起、1970、および泰澄大師奉讃会編：越の大徳 泰澄大師、1971、などを参照している。
- 11) 瑞源寺所蔵の『瑞源寺由緒書』
「一、当寺者探源院様吉江御在居之節、花蔵寺住持太随右之所ニ瑞源寺与申古跡御座候ニ付、拝領仕度旨御願申立候処、願之通被仰付、小院建立仕看主入置申候」
- 12) 註1に掲げた『御系図』の昌親の項 「正保二年乙酉十月十九日分封二万五千石、居於丹生郡吉江」
- 13) 註11に掲げた『瑞源寺由緒書』
「一、延宝元丑ノ年十二月三日 高照院様於江府御逝去被遊、其後御位牌小院江被為入候而、御忌日度ニ御法事被仰出、太随華蔵寺ヨリ罷越、御焼香相勤申候(中略)御法名を以、山号与仕、則高照山与申候」また高照院の御霊屋については「一、延宝七未ノ年高照院様御七回忌ニ御当り被遊候ニ付、御霊屋御建立被遊(後略)」とある。
- 14) 註11に掲げた『瑞源寺由緒書』
「一、延宝二寅年探源院様江御家督被仰出、同三年御入部、同年高照院様三回忌相済候後、太随隱居地之願申立候所、最前吉江ニ而被下置候為御替地、於小山谷境内山林被下置、地形御開被下為合力儀千式拾俵被下置、手前作事ニ仕、諸堂成就仕、看主入置申候」
- 15) 註1に掲げた『御系図』の吉品の項
「貞享三年丙寅閏三月六日綱昌以病幽閉、因割封半賜二十五万石及福井城」
- 16) 同じく『御系図』の吉品の項
「宝永元年甲申十月二十八日賜將軍綱吉公諱一字改吉品、同七年庚寅七月五日致仕」
- 17) 註11に掲げた『瑞源寺由緒書』
「正徳元卯ノ九月十二日 探源院様御逝去被遊、(中略)翌辰年御霊屋御建立、御供養相済候而、当寺永々御開基与奉崇敬候」
- 18) 吉田純一、国京克巳、伊豆蔵庫喜：瑞源寺の建築(2) 廟所について、同：同(3)御霊屋について、ともに日本建築学会北陸支部研究報告集、第35号、pp333～340、1992.7、なお高照院御霊屋は老朽化が著しいために1994年6～7月にかけて解体されている。
- 19) 大安寺は 福井藩4代藩主光通が明暦元年(1655)に創立した臨済宗の寺院で、千疊敷と呼ばれる福井藩歴代藩主の廟所が現存している。(高嶋猛他2名：福井県の建築、pp52～54 1989 参照)
- 20) 当寺所蔵の鐘楼に関する棟札や再建の際の勅化帳によれば、鐘楼は文政8年に造られたが、老朽したために昭和62年に取り壊され、現在は柱などの一部の部材が残されているだけである。
- 21) 上間と下間の天井は、棹縁も細く、板も黒ずんでいて一見して古いことがわかる。後述のように上間は御次之間と広さも同じであるからそのまま再用されたとみられる。いっぽう下間は10畳の御休息之間に相当する。したがって現在の天井は切り縮められて再用されたかあるいは隣の御座之間が 同じ8畳であるからこれを転用したと考えられる。
- 22) 柱心々の基準寸法は、1間あたりは6尺2寸～6尺5寸までみられる。しかし、柱太さを考慮しながら柱内法寸法を求めると、いずれも5.99～6.02尺の範囲におさまることから畳割の採用を判断できる。
- 23) 本文掲載の引用文に続いて「御作事改役芦田十右衛門、御作事奉行日比彦之丞、小奉行竹沢甚吉、同西本作右衛門、棟梁大工南部吉兵衛、脇棟梁大工丹生利三郎」など14人の奉行や役人、職人の名前がある。
- 24) 註3に掲げた『続片雲記』に「正徳五未年二月十三日瑞源寺不残焼失、依而御泉水御居間被遺建」とある。
- 25) 瑞源寺所蔵の『焼失記録(文化十年酉正月八日)』に「雪おろし御手人荒刀子共三十七八人罷越し申候、尤寒気強依之内庭にて焼火致候処、火気強二階裏ニ付、色々与ふせぎ候得共不及手せき、庫裏二階一面ニ火廻り、巳半刻ヨリ出火、庫裏、方丈、書院、御霊屋迄不残焼失仕(後略)」とある。
- 26) たとえば瑞源寺所蔵の『御像堂・書院・台所御再建日記(文化十三丙子年)』あるいは文政8年(1825)の年紀がある鐘楼の棟札などによって知られる。同じく『瑞源寺公用日記』所収の文化15年(1818)2月付の口上之覚には「一、当寺焼失後御再建之儀度々願上候処、五カ年間を以被仰付則御像堂、御書院、庫裏等御再建被成下難有仕合奉存候(後略)」とある。
- 27) たとえば『瑞源寺公用日記』所収の万延元年(1860)閏3月29日付の口上之覚に「御遠忌御法会ニ付当春本堂御再建被成下候様ニ置相願申候処、御時節柄御評議茂難成旨、併ら相応之御取り屋等御補理被下候様之御書下ケ御座候得共、早今何之御沙汰茂無御座、依之何卒早速御取り屋御普請被仰付、御法会御指支無御座候様、偏ニ奉願上候 以上」とある。
- 28) 先掲の『続片雲記』の文政13年2月5日条に「當年御帰国より以来御本丸御住居被仰出候ニ付、右取調方御用掛り被仰出候面々には御老中中根孫右衛門、御用人高田波門(以下6人略)」とある。同じく3月5日条には「此度御本丸御住居被仰出追々御普請も有之御地築等も相初り候様に及承候(中略)三月廿一日・廿二日御地祭、同廿七日新初(後略)」とある。また完成については「天保二卯年出来 御本丸住居中之図」(輝輝)からわかる。
- 29) 『続片雲記』の万延元年9月12日条に「先達而瑞源寺手狭ニ付、本堂替りとして御本丸御座之間を御建被成」とある。なお、ここには御座之間とあるが、小座敷を御座之間と呼んでいる場合もみられるから同じ建物と判断できよう。
- 30) 福井藩主の別邸である御泉水邸は広い池泉に望んでたち、越前における近世数寄屋風書院の代表例といえるが、「松平文庫」の「御泉水指図」の覚によると、書院の柱太さはわずかに3寸1分である。
- 31) 本文に掲げた年号の他に「上大工町竹下曾〇」、「越州敦賀法泉寺町大工兵左衛門、倅喜之助」などの墨書もみられる。

(1995年6月7日原稿受理、1995年8月2日採用決定)